

# 宗教と現代

## 活動を通して感じる

### 命、平和、そして信仰



閉塞感が漂い、どこか刹那主義的とも思える今日。若い世代の人たちは何を支えに、どんな生き方をしようとしているのだろうか。金光教東京学生寮には、寮生の中で自主的に震災復興ボランティアや沖縄での遺骨収集活動などに参加している人たちがいる。活動を通して、何が変わっていったのか。活動に参加した3人に集まってもらい、ボランティアのこと、命のこと、平和や信仰について、それぞれの体験に触れながら話し合ってもらった。

（司会進行・編集室）

▲東日本大震災復興ボランティアで、中央マスク姿が近藤さん

### 震災の被害に言葉失い「普通」の有り難さ知る

皆さん、東日本大震災の復興ボランティア（\*1）に参加されたということですが、被災地で感じられたことは。

片島 僕は5歳の時に神戸で阪神・淡路大震災に遭いましたので、その時の記憶がありますが、6月中旬に東京寮の後輩と初めて気仙沼に入って、そこで見た光景は、神戸とは被害の状況が違っていました。建物が崩れているというより、何もかもなくなっている光景には本当に衝撃を受けました。

近藤 僕は片島君が行った前の週に他の寮生と行かせてもらい、その後何度か行かせてもらったんですが、初めて被災地に入って目にしたあの光景は、とても言葉にはできないものでした。

東京でも大きな揺れでしたが、まさかあんな大震災が起こったとは思いませんでした。しばらくしてテレビをつけたり、仙台空港に津波が押し寄せる映像が飛び込んできて、大変なことが起きているんだと。藤原 私6月中旬に行かせてもらいましたが、言葉が出なくて。ここまで波が上ってきたのかと、信じ

られない思いでした。

被災地では、何か力にないかという気持ちでいっぱいでした。その後も、夏休みを利用して、また9月中旬にも復興ボランティアに参加させてもらいましたが、被災地を離れて自分の生活に戻ると気持ちが薄れてしまい、それでいいのかなど何か落ち着かないというか、そんな気持ちが続きました。

震災ボランティアを経験して、その後、何か見方とか考え方が変わったというようなことはありましたか。

近藤 被災地で被災したホテルの片付けをさせてもらった時のことです。泥がきから始まり、その後は、食器皿をひたすら洗うというような単純作業が続く中で、どうしても飽き

がきて、自分は何をしようとしているのかを見失いそうになりました。そんな中でふと、これらのお皿を今まで使ってきた人がいて、これからも使う人がいるのだという思いになった時に、そこに関わる人のことが思われ、お皿が単に物としてではなく、命をつなげてくれる生きたもののように感じられたんです。それ

は、今までの僕にはなかった感覚でしたね。

片島 地震発生の翌日、気仙沼出身の学生寮の後輩が、集会所で一人、気仙沼の街が燃えている様子をテレビで見ているんです。そこには黒煙の向こうに朝日が写っていて、後輩は僕に「こんな時でも、朝日って

きれいなんですね」と、ほつりと言いました。家族の安否がまだ分からなかった中で、そう言ったのです。その言葉が胸に響きました。

その後、ご祈念させてもらいましたが、なぜこういうことが起きたのかと、神様を責めるような思いは起こらず、「きょうも、ありがとございます」という祈り方になって、自分でも少し驚きました。

藤原 友人や家族のいること、こうして普通に生活できることが当たり前になってしまっていて、そのことに感謝することを忘れてしまっているなと思ってしまいます。食事にしても、自分で食材を買ってきて作って食べるというように、自分主体でしか考えていませんでした。いろいろな人や物のお世話になってきているんだと。そのことに気が付かせてもらえたように思います。

近藤 自分で生きているという考え方は、近代の教育

の在り方とも関係していると思います。我（われ）思う、故に我あり、という自我を中心にした考え方に立って、僕たちは教育を受けてきましたから。でも、沖縄遺骨収集（\*2）に参加させてもらった時に、こんな経験をしました。

## 自力は自然から与えられた力 自分を生かす働き見失わぬよう

近藤 晃さん こんどう・あきら / 1988年生まれ。今年3月に大学を卒業し、4月から社会人。



金光教那覇教会の林雅信先生から頂いた冊子の中に、「自分」とは自然から分け与えられた存在で、「自力」とは自然から分け与えられた力であるという意味の文言があつて、はっとしたんです。

自力で生きるとは、自分の力だけで生きることのように考えますが、その自力も与えられた力なんです。それが今日、混同されてしまつて、他者の存在や物との関連性が見失なわれているのではないかと思います。だから、主体的に生きながらも、自分を生かしてくれている周りの働きを見失ってはいけないと思うようになりましたね。

戦争の酷さ平和の尊さ 遺骨収集を通して体感

いま、近藤さんから沖縄遺骨収集の話が出ました。皆さんはこの活動に参加した経験もあるんですね。どんなことを感じましたか。

片島 僕は今年初めて参加したんですが、その場に立つことの大事さを感じました。

今回、僕の班では遺骨はあまり見つかりません

したが、(東京学生寮へ) 3)の寮監の辻井(篤生) 先生が日頃から「声なき声 を聴いてほしい」と言われ ていたので、何か聞かせる かとその場で耳を澄ませた んです。でも何も聞こえま せんでした。

で、さらに耳を澄ませて いると、遠くから波の音が 聞こえてきたんです。この 波の音は、昔から何も変わ っていないんだらうなっ て、そんなことを考えてい るうちに、沖繩戦で亡くな った人たちはこの波の音を どんな気持ちで聞いていた んだらうと、そんな思いが 胸をよぎりました。そし て、今のこの平和はそうし て亡くなっていった多くの 人たちの尊い命の上に成り 立っているんだと、そうい う思いが湧いてきたんで す。

僕たちは、平和の時代に 生まれ、それが当たり前の中 で育ちました。だから、戦争の恐ろしさも平和のあ りがたさも、本当のところ は分かっていません。あと 少しすると、戦争を知らな い世代の人たちだけになり ますが、現地に触れて声なき 声を聴こうとすること も、僕たちができる平和への 取り組みの一つかなと思 いました。

# 現地に触れ「声なき声」を聴く

## 尊い命の上に成り立つ今の平和

片島 立教さん

かたしま・たつり / 1989年生まれ。3月に大学を卒業し、5月に金光教学院(金光教の教師養成機関)へ入学。



人が殺される場面が簡単に描かれていて、知らないうちに死に対する感覚が現実を離れていってしまった。

でも、現地に立つと、土の臭いも感触もあるわけで、そこで多くの人が恐怖と絶望の中で死んでいったことを思うだけでも、教科書などで学習するよりはるかに多くのものが心に残りました。

近藤 僕は去年に続いて今年と、2回参加させてもらいました。辻井先生から黒アゲハチョウは戦争で亡くなられた方々の魂の化身だ

### 寮での出会いと活動で心が信心に向いてきた

——ところで、皆さんは信仰についてどう思っていますか。

藤原 信心は、心が助かっていくことだと思います。

私は小さいころは親に連れられて教会に参拝するところから始まって、成長するに従って反発した時期もありました。でも、こうして学生寮に入らせてもらって、先輩やいろいろな人も出会わせてもらい、気持ちも折れそうな時には、みんなに支えてもらって、信心の縁を頂いていて本当に良かったと思いま

す。それと、物事の見方が少

という話を聞いていて、去年も今年もその姿を見ました。実際、黒アゲハが飛来する場所まで遺骨が見つかったり、作業現場近くのトイレをきれいに掃除していた時にも飛んできて、何度かその周りを回って飛び去ったりとか。その時は、一緒に参加していた寮生と、「あれはみたま様が、ありがとうと言ってくれたんだ」と話しましたが、理屈抜きに、亡くなられた方々と僕たちがつながっているような、そんな感覚になりました。

今日、宗教が社会の中で受け入れられにくいのは、一つには「宗教」という言葉が何か組織的なものをイメージさせ、強制とか独善

や束縛への警戒があるからではないかと思えます。また、教えや考え方が先行して、身体を通して感じていく部分が弱くなっていることも、宗教が全体的に魅力を失っている原因の一つにあるのではないのでしょうか。

先に「教え」を出されて、こういうふうな考えなきさい、こうしなきさいと一方的に言われても共感できないと思います。体験して、そこで自ら何かを感じるものが宗教には大切だと思います。

片島 一口に宗教といっても、僕たちの世代の意識の中では、お寺や神社などは宗教のくくりから外れるところがありますね。

僕の周りでも、神社や仏閣への参拝は抵抗なくしていますし、特定の信心をしていないから信心がないとは一概に言えません。ただ、「宗教」という言葉を出したら駄目ですね。

信仰そのものへの抵抗感ということではなく、近藤君が言ったように、「宗教」のイメージに対して強い抵抗感があるということだと思います。それにはいろいろ理由があるはずで、その辺りは僕にはよく分かりませんが、神様の存在を疑っているというより、神様を語っている人や集団を疑っているようなところがあるのではないかと思えます。

近藤 東京学生寮での生活は、単に学生生活を送る場というだけでなく、遺骨収集や復興ボランティアなどに携わる機会を与えてくれ、またそのことを通して多くの人たちと出会わせてもらえました。

# 信心は心が助かっていくこと

## 寮生活を通して物の見方に変化

藤原 茜さん

ふじわら・あかね / 1992年生まれ。現在大学2年生。



近藤 東京学生寮での生活は、単に学生生活を送る場というだけでなく、遺骨収集や復興ボランティアなどに携わる機会を与えてくれ、またそのことを通して多くの人たちと出会わせてもらえました。

そうした人たちとの関わりの中で、おのずと物の見方が変わっていき、信心に心が向いていったように思います。

片島 うまくいかないこともありますが、僕はそれも幸せの中のことだと思っています。そう考えられるのは、金光教の信心に触れ

ているからでしょうね。世の中には心の病や問題を抱えても、相談する人や場のない人もたくさんいると思います。ここには、何か困ったり悩んだりした時に自分を支えてくれる仲間がいます。そんなよりどころを持つたこと自体、幸せなことなんだと思います。

藤原 私も、復興ボランティアや遺骨収集など一緒に取り組む仲間がいるこの学生寮は、大きなよりどころだと思っています。

(この座談会は、2月28日に東京学生寮の集会所で実施しました)

いる。参加者総数は延べ7千人を超え、子どもや若者の参加も多く、信心を磨く場であるとともに、平和教育の場としても大きな役割を果たしている。

(\*)1 震災復興ボランティア  
首都圏災害ボランティア支援機構(首都圏フォーラム、東京センター、東京都教会連合会)で構成。では宮城県気仙沼市での復興活動を継続して行ってきた。

また、金光教少年少女会連合本部では宮城県石巻市に拠点を構え、継続的な復興支援活動に当たっている。さらには金光教大阪災害救援隊が被災地の孤立集落への支援を続けるなど、このほかにも教内各面での取り組みが行われてきている。

(\*)2 沖繩遺骨収集活動  
この活動は、有志の呼び掛けで昭和52年から始まり、その後、金光教沖繩遺骨収集運営委員会が中心となって平成14年まで続けられた。

その翌年からは、那覇教会と有志がこの活動を継続して今日に至って

現在地には、昭和34年に鉄筋3階建ての寮が建設され、建て替えを経て今日の学生寮へと続いている。これまでに延べ9百人近い寮生を送り出し、教務総長をはじめ多数の金光教教師のほかに、作家の小川洋子氏など、各方面に多くの人材を輩出している。現在の寮監は辻井篤生氏。

住所/東京都小金井市貴井北町5丁目22番27号  
TEL/042-3326-0444

0444